



# HOKKAIDO UNIVERSITY

|                  |                                                                                       |
|------------------|---------------------------------------------------------------------------------------|
| Title            | 連環画の中の雪男 : ふたつの『雪山魔笛』                                                                 |
| Author(s)        | 中根, 研一                                                                                |
| Citation         | 連環画研究, 3, 92-119                                                                      |
| Issue Date       | 2014-03-10                                                                            |
| DOI              | <a href="https://doi.org/10.14943/2115.98402">https://doi.org/10.14943/2115.98402</a> |
| Doc URL          | <a href="https://hdl.handle.net/2115/98402">https://hdl.handle.net/2115/98402</a>     |
| Type             | departmental bulletin paper                                                           |
| File Information | renkanga_3_92-119.pdf                                                                 |



# 連環画の中の雪男

——ふたつの『雪山魔笛』——

中根研一

## ヒマラヤの雪男

未確認動物の中でも、全世界的なブームを巻き起こし、現在まで高い知名度を保ち続けているものはそれほど多くはない。その中でも、スコットランドはネス湖の怪獣「ネッシー」を西の横綱とするならば、おそらく東の横綱はヒマラヤの雪男「イエティ」ということになるだろう。

チベットの伝説中の存在「イエティ」については、古くから言い伝えられているものの、現代的な意味で「未確認動物」と認識され、搜索の対象となったのは19世紀以降の話である。植民地統治政策の一環で、イギリスによるヒマラヤの登山探検が頻繁におこなわれるようになり、その過程で不思議な話とともに足跡などの目撃報告が相次ぐ。

そして1951年、イギリス人登山家のエリック・シプトンによって撮影された「雪男の足跡写真」が、全世界にセンセーショナルな話題を提供した。この視覚的なインパクト絶大の写真が配信されるや、雪男の名は瞬く間に知れ渡り、各国の雪男調査探検隊が組織・派遣されるなど、空前の雪男ブームを巻き起こしたのである。

初期には、1953年のイギリスのデイリーメール社による探検隊を皮切りに、1958年にはソ連科学アカデミーによる搜索隊、1959年には東京大学医学部の小川鼎三教授率いる「雪男学術探検隊」が次々に現地へ派遣されている。その後、大きな組織から個人にいたるまで、大小様々な探検隊による搜索がおこなわれ続けているが、いまだ雪男の真相は明らかになってはいない。

最初の雪男フィーバーから半世紀以上たった現在も、時たま雪男をめぐる言説がメディアを賑わせる。2011年にはロシアのケメロボ州で雪男の国際学会が開かれ<sup>1</sup>、その際の搜索で発見された体毛を鑑定した結果、謎の生物のものである確率が60～70%であると発表されて話題となった<sup>2</sup>。しかし、2013年に同じ毛髪をイギリスの専門家が再鑑定したところ、クマの毛であることが判明している。そもそも、ケメロボ州では、雪男の記念碑を建ててグッズ販売にも力を入れるなど、町興しに利用しているという事実があり、一連のイベントもその延長線上にあると考えた方がよい。

また記憶に新しいところでは、2013年にオックスフォード大学のブライアン・サイクス名誉教授が「雪男の正体は古代ホッキョクグマ」であると発表したという仰天ニュースが報じられた<sup>3</sup>。ヒマラヤで採取された雪男と見られる毛を鑑定したところ、

古代ホッキョクグマの DNA と完全に一致したというもの。興味深い結果ではあるが、これもまた雪男伝説の一部分でこそあれ、それがすべてではあるまい。

近年の日本でも、様々なアプローチで雪男の謎に迫った著作が生まれ続けている<sup>4</sup>。その中でも登山家・作家の根深誠氏は著書『イエティ ヒマラヤ最後の謎“雪男”の真実』（山と溪谷社、2012）<sup>5</sup>において、いくつかの興味深い点を指摘している。そもそも「イエティ」という言葉は、現地の言葉でチベットヒグマを指す単語であったにも関わらず、そこへ西欧の探検隊によって勝手なロマンが重ねられて現代の「未確認動物」としての雪男が「創出された」とする主張は傾聴に値する。上述のデイリーメール社の探検隊は、調査時に（彼らの考えた）雪男の想像図をハガキ大の用紙に印刷したものを、現地のシェルパにた

ちに配付していた。つまり、この西欧の探検隊によって持ち込まれた想像図こそが、皮肉なことにかえって現地に「現代の未確認動物としての雪男イメージ」を決定づけてしまったというのが根深氏の見立てである（私もその可能性は高いと思っている）。同書の表紙に引用されているのが、その配付された想像図だ【図版 1】。まさにゴリラのような霊長類を想定していたことがわかる。

1955 年に出版されたそのデイリーメール社の探検隊の記録<sup>6</sup>に、付録としてウラジミール・ツェレンスキーの“忌まわしき雪男”の正体は何か」という論考が掲載されている。そこではやはり足跡や頭皮といった資料から、雪男の正体は霊長類であると推測されており、ウラジミール氏の手による想像図のスケッチが載せられている【図版 2】。これもまた、雪男＝ゴリラ型のイメージを世に浸透させることとなったと考えられる。

先に見たように、近年は生物学的にも文化的にも「雪男の正体はクマだった」というの



【図版 1】表紙に引用された雪男像



【図版 2】流布された雪男想像図

がトレンドのようである（もちろん 1950 年代当時もクマの誤認説自体は一応存在した）。雪男伝説はリアルなスケール、落とし所を探しながらも、今でもその話題としての命脈を保ち続けていると言えよう。しかし、かつては間違いなく、未知の霊長類、人類進化の過程におけるミッシングリンク、原人、猿人といった正体が想定されていたのである。新聞や書籍に載ったゴリラのような想像図は、当然ながら世界中で各種映画や漫画などのフィクション作品の中でも、雪男のビジュアルとして引用され続けた。

さて、中国においても雪男の知名度は高い。特に 1970 年代半ばから 1980 年代はじめにかけては、同時期にブームとなっていた「中国版雪男」たる〈野人〉の存在<sup>7</sup>のリアリティを担保するかのようになり、各種メディアで頻繁に紹介されていた<sup>8</sup>。

中国における雪男をめぐる言説については、いずれ改めて考察する機会を設けたいが、今回は雪男の図像、特に中国の連環画に描かれたイメージを並べてあれこれと考察してみたい。おそらく中国初の雪男小説である『雪山魔笛』<sup>せつざんまてき</sup>と、その連環画版を見てみよう。

### 童恩正の S F 小説『雪山魔笛』

<sup>どうおんせい</sup>童恩正（1935-1997）原作の「雪山魔笛」は、1978 年、『少年科学』誌に掲載された S F 小説である<sup>9</sup>。

伝説や迷信と思われていた雪男の正体が、中国の科学力と「社会主義の大協力」によって未知の動物であったと解明されるストーリーで、その概略は以下の通りだ<sup>10</sup>。

かつての紅教（チベット仏教の一派であるニンマ派）の聖地であった<sup>てんかりんじ</sup>天嘉林寺を調査中の、王新率いる考古学調査隊。彼らはある日、17 世紀前半の伝説の高僧ラプサン・ギャムツォが「山精（山の物怪）」を召喚したという人骨（脛骨）製の魔笛を発見する。その夜、調査隊に参加していた青年スオルンが、伝説の真偽を確かめるために実際に三度笛を吹いてみたところ、調査隊員である女子学生の馮元が闇夜の中にただならぬ足音を聴く。翌朝にテント付近を見ると果たして雪上には謎の足跡が残されていた。足跡の主が踏んだと思いき空き缶には、血痕も……。

魔笛と謎の足跡の写真、血液標本を北京の中国科学院へ送付して三ヶ月後、人類学者・朱葦教授に招かれて北京の科学会議に出席する考古学調査隊の一行。そこでおこなわれた朱葦教授の研究報告によれば、くだんの足跡や血液は「北京原人よりも古い」「人とサルとの中間の生物」の生き残りのものであるとのこと。また、魔笛を動物園の類人猿たちに聞かせる実験をしたところ、一様に音の聞こえた方向に餌を探しに行く行動を見せたことから、魔笛とは、食べ物の在りかを知らせる原人の声と同じ音が出るように作られたものではないか、と朱葦教授は推測する。

各専門分野のエキスパートたちの提案で、魔笛の音を模倣して原人の感情をコントロールする電子式の発声シミュレーター、小型レーザー探知器、赤外線カメラ、高性能收音機などが次々と準備された。観測ステーションとなった天嘉林寺内に最新鋭の機器を設置し、調査隊は原人の出現をひたすら待った。

人工的に作られた「魔笛の音色」に誘われて、ついに姿を現したのは、一片の熊皮を身にまとい、石器を手にした原人たち。食べ物を発見した原人たちは、お互いに言語らしきものを用いて意志の疎通を図っており、焦げた熊皮からは、火の使用もおこなわれていると推測された。労働をする彼らは既に人の範疇にある！

それは、人類進化の歴史を書き換えるミッシングリンク（失われた進化の環）の意義のある大発見であった――。

実は作品中、中国語で雪男を指す「雪人」という単語は一度も出てこないが<sup>11</sup>、チベットという舞台、チベット仏教の伝説の存在という性格付け等々の状況証拠から考えて、出てくる生物はヒマラヤの雪男がモデルと考えて間違いない。本作は、実際に考古学者であり、チベット付近でのフィールドワーク経験もある童恩正の代表作でもあり、伝奇的色彩の中にも学術的リアリティの香り漂う作品となっている。

魔笛とその効用についてはもちろん小説の中のフィクションであるが、チベット仏教の僧侶がみずからの威厳を高め、民衆に信仰心を植えつけるために、伝説上のイエティを説伏する物語を利用するというのは実際珍しくはなかったようである。根深氏は前掲書の中でその例をいくつか紹介した上で、現在ヒマラヤのクーンブ地方に残されている「イエティの頭皮」と呼ばれるもの（現在、それは観光資源にもなっている）も、そもそもはその説伏物語の信憑性を高めるために作られたものではないかと推測し、物語については「ヒマラヤの高地で暮らす半農半牧の住民にとって害獣として恐れられているイエティを、創作物語の中で僧侶が手なずけたり服従させたりできるのは神通力があるからにはほかならない、という筋立てであり、そのように信じられている」<sup>12</sup>と説明している。

チベットに詳しい童恩正も、もちろん、このような僧侶とイエティとの説伏物語を知っていたのではないだろうか。その上で、本来は僧侶の威厳を高めるために機能していた物語を解体し、自国の科学力と社会主義の大団結の勝利の物語へと再構築したものが、この「雪山魔笛」であったと言える。

## 迷信と文明のコントラスト

本作には、決して強い口調ではないものの、登場人物によって迷信に支配されたチベット社会に否定的な評価を下す表現も散見される。

たとえば、ラプサン・ギャムツォの魔笛の伝説については、考古学調査隊の隊長で

ある語り手の私（＝王新）によって、このように説明される。

私は一個の考古学者として、過去にチベットの農奴の奴隷主階級がいつもラマ教の迷信による活動を利用しては人々を騙し、彼らの統治のために奉仕させていたことをもちろん知っている。そのため、通常の場合であれば、その類いの伝説などきくと真面目に取りあうことなどないだろう。<sup>13</sup>

直後に、しかし実際に魔笛の威力を目撃した人々の記録があることから、すべて嘘とは思えない……と続けてはいるものの、さらりとチベットの農奴制批判を込めているのがわかる。

また、同じく調査隊の一員で、古代チベット語に精通しているツレンワントウイの口を借りては、以下のように語られる。

旧社会——とりわけ立ち後れたチベットの農奴制社会で、人々がまだ自然の不思議を把握してはおらず、まだその法則を理解できない時代にあつては、多くの科学的な現象が迷信というベールに覆われていました。あわせて、統治者階級によって故意に歪められ、彼らの利益のために供されていたのです。私は「魔笛」の問題は、まさにそのような性質のものではないかと思っています。<sup>14</sup>

また、これらに対応するような形で、全世界に先駆けた雪男の発見を「社会主義の勝利」に結びつける（こちらは勇ましい口調の）セリフも多々見られる。

たとえば北京での科学会議で演説する朱葦教授は、このような言葉で専門家の協力を呼びかける。

上級党委員会の指示に基づき、この任務を完遂するには、最新の科学技術と先進の機器設備とを運用し、社会主義の大協力を発揮しなければならないのです。<sup>15</sup>

そして、専門家たちから上がった意見を集約していくのだが、そのくだりは以下のように表現されている。

ひとつひとつの意見が、ひとつひとつの構想が、徐々にひとつの完璧な作戦計画を形成していった。それは集団の知恵と、社会主義科学の大協力の威力とを見せつけるものであった。<sup>16</sup>

きわめつけは、クライマックス。姿を現した原人たちを見た朱葦教授の、感情のこ

もった言葉である。

総じて言えば、彼らは既に道具を作ることができ、労働をすることができます。それ故に、彼らは既にサル（猿）ではなく、人の範疇に属しています。労働は世界を創造し、労働は人を創造したという、その偉大なる真理は、今またひとつ確実な証拠を獲得したのです。同志の皆さん、私たちが今日にしているのは、決して単なる自然現象ではなく、自然弁証法の勝利であり、マルクス主義理論の勝利なのです！<sup>17</sup>

そこかしこで対比される、農奴制の迷信社会と社会主義の文明社会——。最新鋭の機器が設置され、原人調査の観測ステーションと化した天嘉林寺を描写するくだりは、まさにそれを象徴している。

往時の仏壇の上には、赤や緑にきらめく信号灯のコントロールパネルが取り付けられ、神怪の描かれた壁画の前には、大小様々な蛍光スクリーン。レーダーとテレビにつながれたアンテナは、屋根の上の経幡〔チベット仏教の経文の書かれた幟〕の上に聳え立っている。ここにおいて、古きものと現代、迷信と文明とが、この地で強烈なコントラストを形成し、世界で最も奇妙なムードを持った実験室となったと言える。<sup>18</sup>

SF小説中の、このような「迷信を信じる人々へ対する啓蒙の姿勢」や「社会主義礼賛」は、なにもひとり本作にのみ見られることではない。迷信や怪奇現象を、現代の科学力と結束した人民の力で解明するというフォーマットの作品は珍しいものではなく、後に数多生まれる現代中国の〈野人〉小説群にも見られる傾向であった<sup>19</sup>。

本作の時代設定は一読すると同時代にも思えるが、テレビ電話が実用化されていることや、原人調査の機器の性能から考えて、「中国の輝ける近未来」もしくは「科学の著しく発達したパラレルワールドの現代中国」を舞台にしているということになるだろう。

さて、古代と現代（近未来）、迷信と科学とのコントラストが強烈な本作が、連環画化された場合、一体どのように描かれるだろうか。

## 連環画版『雪山魔笛』二種

『雪山魔笛』の連環画については、代表的なふたつのバージョンが手元にある。

鄭子銘改編／翁開恩・方金河絵『雪山魔笛』(64 開本、横長、全 74 コマ、福建人民出版社、1980 年 8 月、第一版の印刷部数 255,250 部、以下「福建版」と、暁棠改編／王弘力絵『雪山魔笛』(64 開本、縦長、全 70 コマ、遼寧美術出版社、1980 年 11 月、第一版の印刷部数 614,000 部、以下「遼寧版」)である。両者ともに上図下文タイプだ。



【図版 3】福建版表紙

いずれも 1980 年に発行されたもので、基本ストーリーには原作からの大きな変更点はない。ただし、福建版には「童恩正原著」の文字があるが、遼寧版には原作者名のクレジットがない（この謎については後ほど考察することにする）。

まずは表紙を比べてみよう。

福建版【図版 3】は、人物の顔がメインである。右端で笛を吹く人民解放軍の冬服に冬帽（雷鋒帽）姿の男性（スオルン？）。左端には、やはり笛を吹く老人（伝説のラマ僧？）。中央には、驚いて目を見開いた女性（馮元？）。老人の下には、神妙に笛の音を聞いているかのような座り込んだ五つの小さな影。これらが、コラージュされているものである。過去と現在の人物がオーバーラップするような形で描かれたこの表紙、彩色されているのは右端の人民解放軍の出で立ちの男性のみ。「迷信」「未開」、もしくは「無知による驚き」には、色は与えられないのである。真っ黒に塗りつぶされた五つのシルエットが、つまり雪男（＝原人）たちということになるだろうが、表紙をみただけではそれとはわからない。見ようによっては、ラマ僧を敬う「旧社会」のチベット仏教信者の姿であるとも取れよう（それを意図したダブルミーニングの可能性もある）。つまり、福建版の表紙では肝心の正体が隠されているのである。中身を読んで初めて、雪男の登場を知るという仕組みだ。



【図版 4】遼寧版表紙

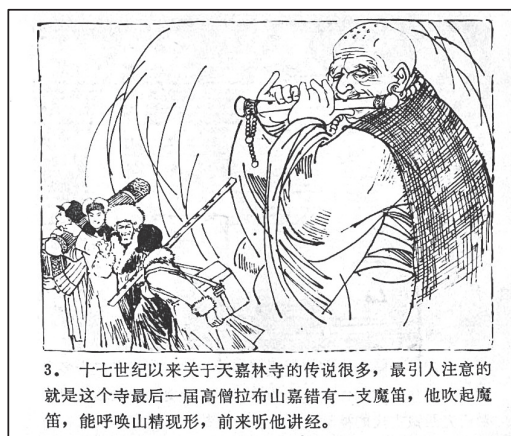
それに対して、遼寧版【図版 4】は表紙からいきなりネタバレである。下半分に、ゴリ

ラともチンパンジーともつかない黒い類人猿の顔が、デカデカと描かれている。その上部には、いわゆる魔笛が描かれ、先端部から同心円状に光を発している。おそらくは音声が届いていく様子を表現したものであろうことは、同心円の環に頭のかかったこの類人猿の視線が、それに反応するかのように魔笛の方へ向けられていることからわかる。

対照的な二冊の連環画だが、もうひとつ、大きな違いにお気づきだろうか？  
魔笛にご注目いただきたい。そう、福建版は横笛で、遼寧版は縦笛なのである。

### 人骨製の魔笛

遼寧版では表紙に演奏者が描かれていないので、縦笛か横笛か判然としないかも知れないが、本編でそれは明らかにされている。過去の情景として伝説の高僧ラプサン・ギャムツォが笛を吹く場面と、現代のスオルン（福建版のみ人民解放軍の冬服姿で描かれていることにも注意したい）が実験と称して魔笛を吹くシーンを、それぞれ見てみよう。



【図版 5】魔笛を吹く高僧（福建版）



【図版 6】同じくスオルン（福建版）

福建版【図版 5】【図版 6】では、いずれも横笛の要領で口に当てているが、かたや遼寧版【図版 7】【図版 8】では、笛を縦にして吹いているのがわかる。

一体どちらが正しいのだろうか？

原作中で魔笛を描写する原文は「笛子」であり、それは一般的に中国語で「横笛」を指す単語である。もちろん、中国には縦笛もあるが、それらはたとえば「洞簫」といった別の呼称が与えられている。チャルメラのような管楽器もあるが、それは「嗩呐」である。そう考えると、福建版の方が原作に忠実な「正しい表現」ということになるだろうか。

「人骨製の笛」と聞くと、あるいはギョッとされるかも知れない。そもそもこの部分も、チベットの野蛮さを強調するための作者による創作なのではないか、と思われるかも知れないが、実際チベット仏教には人間の大腿骨で造った「カンリン」と呼ばれる笛が存在し、儀礼などで使用されている。



6 “天嘉林寺最著名的高僧是拉布山嘉错，据说他精通巫术能降魔伏鬼。他有一支远近驰名的魔笛，每当说法时吹起魔笛，可使山精结群前来听他讲经。”



42 索伦说：“吹一遍也许不行，我可以吹三遍。”接着他又吹响笛子。这种声音实在不大悦耳，连支持索伦的冯元也有点受不了，但是为了证明笛声有无魔力，只好听他吹完。”

【図版 7】魔笛を吹く高僧（遼寧版）【図版 8】同じくスオルン（遼寧版）

用されている。楽器への人骨の利用は、チベットの死生観とも密接に関連しており、一概に「未開」や「野蛮」といった言葉で片付けられるべきものでもない<sup>20</sup>。

そしてそのカンリンは、通常縦にして演奏されるのである。

その事実だけを見ると、縦笛に描いている遼寧版が、むしろ現実に即していると言えそうだ。

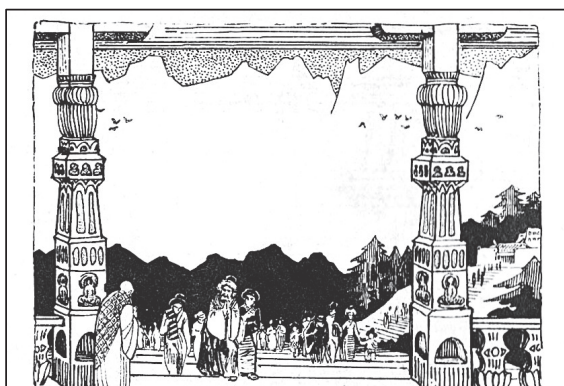
以上のことから考えるに、福建版の絵師は、現実のチベットにおける人骨笛の形状はさておき、原文にある「笛子」の意味を原義通りにとらえ、横笛を描いたに過ぎないのではないだろうか？ 反対に遼寧版は、原作に沿いながら、他に何かの図像資料を参照（検証）しながら描いたと考えられるのである。

## 福建版と遼寧版の特徴

それを裏づける特徴として、全体的に見て、福建版は人物のクローズアップが目立つ一方、その背景となる寺院やチベット仏教の文物については重きを置かず、驚くほど描写が少ないことが挙げられる。壁画や仏像にいたっては、むしろ中国内地のものを思わせるものが多い。それに対して遼寧版では、遠景・背景を精密に描き込んだコマが多いのが特徴的で、寺院も壁画も仏像も実物に近い描き方をしている。魔笛を発見するまでの天嘉林寺での調査シーン（過去の回想場面含む）も、福建版が全 74 コマ中 15 コマに過ぎず、かなり駆け足で描写しているのに対し、遼寧版では全 70 コマ中実に 26 コマを費やし、じっくりと見せている。

たとえば、冒頭で天嘉林寺に到着するシーン。福建版では寺の全景ではなく、内側

からの視点で描いた入口の場面（僧侶も漢族風？）のみである【図版9】（実は福建版は全編を通じて一度も寺の全景は登場しない）。かたや遼寧版では、ロングショットで特徴的なチベット建築の寺院を見せている<sup>21</sup>【図版10】。



2. 天嘉林寺是红教的圣地，当时朝香拜佛的人络绎不绝。后来由于内部争权斗争，天嘉林寺被焚毁，只剩下残垣断壁，唯有幸存的鎏金尖塔，寂寞地矗立在坡顶上。

【図版9】天嘉林寺（福建版）



2 这年夏天，中国科学院考古研究所抽调人员组成考古调查队，分赴西藏各地进行调查工作。由次仁旺堆、索伦、冯元和王新组成的第一组，这天来到天嘉林寺。

【図版10】天嘉林寺（遼寧版）



4. 中国科学院的考古调查队在寺院废墟上进行了三个多月的考查工作，找到许多珍贵的雕板、手抄文献、宗教法器，对研究西藏古代的神话、民族、历史都有重要参考价值。

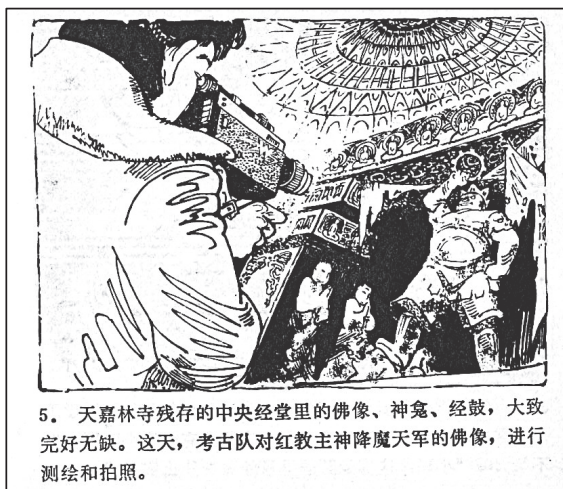
【図版11】壁画（福建版）

チベット族の神話世界が描かれているという天嘉林寺内の壁画も、福建版【図版11】では、遼寧版【図版12】のようなチベット色は薄く、むしろ漢族の画像石によく描かれているような図案になっている。



10 他们几个人的工作分工是：索伦是历史博物馆的摄影师，负责拍照；冯元是大学毕业后参加实习的学生，负责测绘；次仁旺堆和王新负责记录和整理文物。

【図版12】壁画（遼寧版）



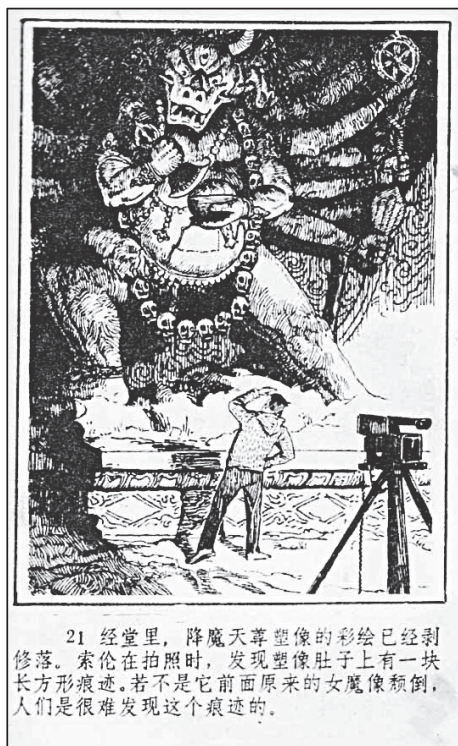
5. 天嘉林寺残存的中央经堂里的佛像、神龛、经鼓，大致完好无缺。这天，考古队对红教主神降魔天军的佛像，进行测绘和拍照。

【図版 13】降魔天尊像（福建版）

次に、原文では「目を見開いて口を歪めて歯をむき出し、手には法輪を持ち、足で妖魔を踏みつけているその姿は、非常に恐ろしいものであった」<sup>22</sup>とだけ描写されている降魔天尊像を、見比べていただきたい。福建版【図版 13】は確かに原文に忠実に、過不足なく描いてはいるが、下から煽る構図を取ることで克明な描写を避けている。一方、遼寧版【図版 14】は闇に浮かび上がる獣面で多臂多足の立像<sup>23</sup>が、精緻な筆致で再現されている。やはりこれは、遼寧版の方はリアリティを求め、原作にはない情報を図像資料で補いながら描いたと考えるのが自然である。さらに言えば、福建版では十分な資料がなかったため、「正確に描けなかった」といったところであろう。

寺院内での魔笛発見場面も、ツレンワントウイが虫眼鏡で同封された文書を読む場面も、福建版では仏像の足元越しに人々が取り囲むようにしているため、肝心の部分が（おそらく意図的に）見えないような構図となっている【図版 15】【図版 16】。本来手に持っているべき魔笛やチベット文字の古文書や、それを入れていた小箱等を、描くことを放棄したかのような「不自然な空白」のあるコマすら存在する【図版 17】（可視化されない文字を読み上げる様は、まるで『勸進帳』である）。

一方、遼寧版では、箱の模様やチベット文字が書かれたような文書と、最重要アイテムである魔笛を大きくしっかりと描いている【図版 18】【図版 19】。



21 经堂里，降魔天尊塑像的彩绘已经剥落。索伦在拍照时，发现塑像肚子上有一块长方形痕迹。若不是它前面原来的女魔像颠倒，人们是很难发现这个痕迹的。

【図版 14】降魔天尊像（遼寧版）



8. 取出铜盒，拂去灰尘，只见盒盖上的封条写着：“阿吗呢叭咪吽”六字真言，还盖有法印。打开盒盖，里面放着一支人骨制的笛子和一卷羊皮纸的手抄本。

【図版 15】見えづらい笛と古文書（福建版）



9. 次仁旺堆是研究古藏文的专家，他仔细地研究手抄本。这份文件经过二百多年，墨迹已经褪色，还有一些巫术的符号和红教术语，看起来十分吃力。

【図版 16】古文書を読んでいる？（福建版）



15. 次仁旺堆抬抬眼镜对冯元说：“在二百多年前，人们还没有掌握大自然的奥秘，很多科学的现象被披上迷信的外衣，统治阶级就用来愚弄人民，魔笛可能就是这样。”

【図版 17】

人々の視線の先にある左下の不自然な空白（福建版）



28 揭去封条，打开铜盒一看，原来是一幅织锦包着一卷写满古老藏文的羊皮纸，和一支用人骨制成的笛子。管子上面有几个小孔，两头包有银饰，这是喇嘛教特有的法器人骨笛。

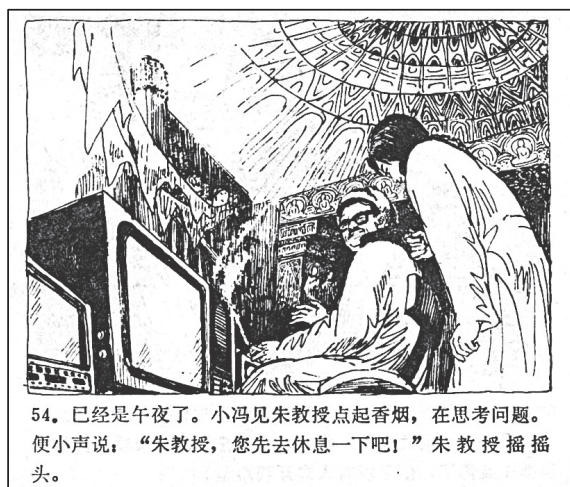
【図版 18】古文書と笛（遼寧版）



29 次仁旺堆拿着放大镜，仔细辨认羊皮纸上的古老藏文。其他人都屏住气息等待着这个谜底的揭晓。

【図版 19】古文書を解説中（遼寧版）

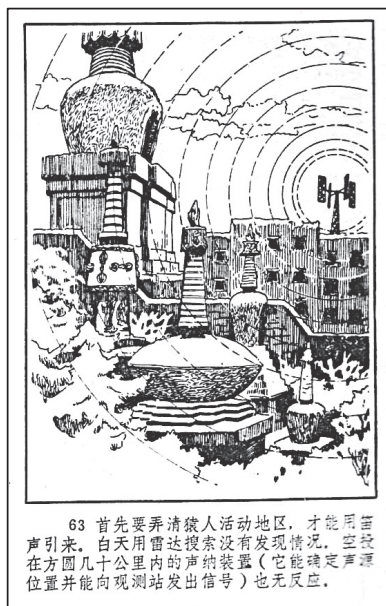
物語後半、「迷信と科学」の対比を象徴する、重要なふたつのシーンを確認しよう。天嘉林寺へのアンテナ取り付けシーンは、福建版には存在せず、遼寧版のみに描かれている【図版 20】。寺院内部に設置されたモニタ類のシーンはさほど違いがないように思えるが、福建版【図版 21】は、チベットの経文の書かれた五色の祈祷旗（タルチョー）が描き込まれているものの、やはり下から煽るような構図で、壁画や仏像の描写は避けられている。遼寧版【図版 22】は信号等の背後に、薄暗いながらも仏像の姿が確認できる。



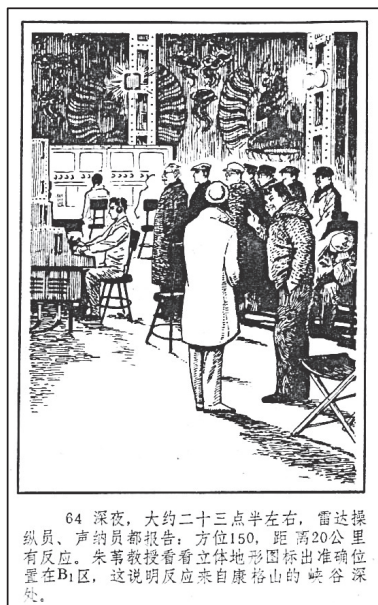
【図版 21】寺院内部（福建版）

以上のことから考えて、先述のふたつの連環画における魔笛の描き分けも、ただ原文に忠実に描いたか、他の資料を参照しつつ描いたかの違いということが、やはり言えそうである。もちろん自身も考古学者である原作者の童恩正は、現地の楽器についても明るかったに違いない。原作中、魔笛を以下のように描写している。

これが人の脛骨を用いて作られた物であることは明らかであり、両端には銀の飾りが嵌め込まれていた。旧社会のラマ教の法器の中では、人骨の笛はよく見られる物である。この笛が非常に精巧に作られていることを除いて、何か特別なところな



【図版 20】アンテナ（遼寧版）



【図版 22】寺院内部（遼寧版）

ど私はまったく見出せなかった。<sup>24</sup>

このような表現から、確かに原文では「笛子」としているが、童恩正としてはカンリンのように、チベットではありふれたタイプの人骨笛を想定していたと考えられる。

——と、あれこれ検証してきたものの、「横長の連環画には横笛」「縦長の連環画には縦笛」といった具合に、それぞれの判型にシンクロするかのように描かれているのは、あるいは画面の広がる方向を意識した各絵師の工夫のようにも思えて面白い。

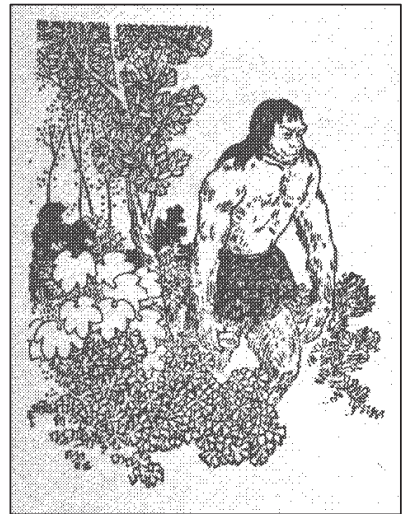
### 原作小説版の雪男像

さて、今度は肝心のメインキャラクターたる雪男（原人）の形象を見ていくことにしよう。

原作では、物語のクライマックスに未知の原人として出現するのだが、その姿はどのように描写されている。

彼〔原人〕の頭には長いざんばら髪がかかっており、顔以外は全身に細く柔らかそうな毛が生えていた。前頭部は低く平らで、後ろに向かって傾斜しており、眉の部分は突出しており、鼻梁は低くて横に幅がある。下あごは後方に向ってすばまり、首は短く太く、頭部全体は前方へ伸び、いささかうつむいているようである。彼の体格はとても強健で、両腕は長いが、それに比べて足は短く、かつわずかに曲がっている。彼は一枚の熊皮を引っかけており、手に拳大の削り作業用の石器を持っている。

原人だ。これこそは早くに自然界から消滅してしまった原人であり、博物館の中のわずかな化石によって復元された標本ではなく、生きている実物なのだ。<sup>25</sup>



【図版 23】小説版挿絵

単行本に収録された原作小説の挿絵【図版 23】は、これを忠実に再現している<sup>26</sup>。長いざんばら髪・熊皮（の腰巻き）・手にした石器をはじめ、身体的特徴や身に付けたものまでも原作通りであるのがわかる。

このように絵にして見ると、やはりそこには実際の北京原人の復元図が投影されていることがわかる。一方で、西欧の探検隊が思い描いた典型的なゴリラ型のヒマラヤの雪男イメージ（本稿冒頭参照）とは、ズレが生じていることにも気づかされる。

原作本文で言う「博物館の中のわずかな化石によって復元された標本」とは、たとえば【図版 24】のようなものであろう。



【図版 24】北京原人復元胸像（『中国猿人』）



【図版 25】連環画『中国猿人』表紙

これは中国科学院古脊椎動物研究所編による連環画『中国猿人<sup>27</sup>』（科学出版社、1972）からの一コマで、復元された原人（北京原人）の頭部模型である。同作は、同名科学教育映画のフィルムを連環画化したもので、全コマにフィルムから焼いた写真が使用されている。表紙【図版 25】には鹿（？）を担いだ原人が描かれ、左の奥には、焚き火をする原人の姿も確認できる。つまり、狩猟（労働）と火の使用を暗示する表紙となっているのである。同作には、「雪山魔笛」でも引用されていた「労働が

人間をつくる」というエンゲルスの言葉<sup>28</sup>が、太字で、写真とともに紹介されているコマがある【図版 26】。エンゲルスの言葉は、当時ダーウィンの進化論とならび、北京原人発見の歴史的意義を説明する際に頻繁に引き合いに出されていたものである。連環画『中国猿人』では、その巻頭と最終コマにおいても、「北京原人の研究が人類起源の唯物主義理論を発展させ、労働が人間をつくるという真理を証明したのだ」ということが、繰り返し説明されている。

そしてこれは、1970年代半ばから中国国内で話題となっていた神農架〈野人〉調査の場合も同様であった。

公開された神農架の〈野人〉のモンタージュ・イラスト<sup>29</sup>【図版 27】は、まさに北



【図版 26】エンゲルス（『中国猿人』）

京原人の復元図を彷彿とさせるものだった。神農架の〈野人〉と北京原人のような「中国発の大発見」事例とを結びつけてその価値を説くような言説も、同時代においてはよく見られた<sup>30</sup>。中国科学院の専門家からなる国家レベルの調査隊は、1976年から1980年にかけて三度、現地調査をおこない、その模様は中国内外に宣伝された。

——化石どころか、生きた原人が見つければ世紀の大発見である。

「雪山魔笛」に登場する学者たちの主張は、このような当時の中国における北京原人や〈野人〉をめぐる言説が、そのまま移植されたものであることがわかるだろう。

雪男の正体として、童恩正が北京原人のような「原人タイプ」を選んだのは、時代の必然であった。

ちなみに「雪山魔笛」発表翌年の1979年は、北京原人化石発見50周年の記念すべき年に当たり、同年末には北京で記念式典が開かれ、発見場所である周口店には北京原人展覧館が大々的に改装オープンしている<sup>31</sup>。にわかに北京原人熱が高まった時期でもあった。

さて、童恩正の原作小説における原人の描写は、実際のイラストとしてどのように再現されたのであろうか。



【図版 27】〈野人〉想像図

### 連環画版の雪男像 1（福建版）

福建版に描かれた雪男は、総じて原作の描写に忠実である。

前述の通り、福建版は前半の考古学調査の場面のコマ数の割合が少ないため、後半の雪男が登場するシーンはじっくりと見せている。直接に雪男を描いているのは全部で8コマ。表紙でその正体を明かさなかった分、本編では大盤振る舞いである。

まずは雪男の登場に先立ち、北京での科学会議席上で、朱教授が謎の生物の正体を「北京原人よりも古い時代の直立の原人」だと推測するシーンで描かれた原人【図版 28】は、狩猟で得たと思しき鹿（?）を担いでおり、まさに典型的な北京原人イメージが再現されている。そして狩猟をする原人と線装本を描き、「私たちは関連する資料を調査し、戦国時代から現在まで、チベット高原にいわゆる〈野人〉の記載がある」ということを発見した」との文言（原作通り）を付けている【図版 29】。



43. 朱教授微笑地说：“我们首先研究了脚印，初步认为，这种动物介于人类和猿类之间，与大约一百万年以前生存过的直立猿人相近，这种猿人比北京猿人还要原始。

【図版 28】想像の中の北京原人（福建版）



44. “这种已经灭绝了的猿人，为什么又出现了，这可能吗？我们查阅了有关资料，发现从战国到现在，康藏高原都所谓‘野人’的记载。

【図版 29】文献に見える〈野人〉の記録（福建版）

そして、ついに満を持して森の中から姿を現した雪男【図版 30】【図版 31】。これも、思い描いた通りの原人の姿で登場している。その身体的特徴は、ほぼ原作版の表現通りに下の文章によっても説明されている。



62. 随着它逐渐走近镜头，形象就越来越清楚了，它的头上披着长长的头发，前额低平，眉脊突出，鼻梁低而宽，脖子短而粗，整个头部向前伸，就象半低着头的样子。

【図版 30】原人登場（福建版）



63. 它越走越近，大家就越看越清楚了：它的身躯十分强壮，全身茸毛，两臂很长，脚却很短，而且微微弯曲。它围着一块熊皮，一手持着一块拳头大石制的刮削器。

【図版 31】原人全身像（福建版）

そして、原作にあった朱教授の「彼らは道具を作って労働をしているから、既にサルではなく、人のカテゴリーに入るのだ」というエンゲルスを踏まえたセリフも踏襲されている【図版 32】。

最後のコマは、生きた原人の発見という偉業が世界に配信され、サルから人への進化の歴史の学説に関して大幅な修正と補充とをおこなうことになったこと、世界の人類学の科学論壇を震撼させたことを伝える絵と文章で終わっている【図版 33】。これも原作通りである。

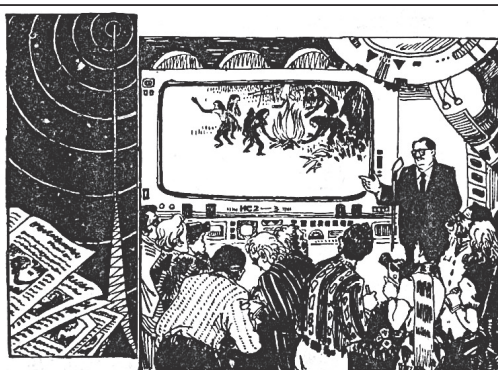
原作「雪山魔笛」のテーマでもある、科学による迷信の駆逐と、社会主義の大団結

によって成し遂げられた人類進化上の新発見（明記はしないが、ひいては自然弁証法・マルクス主義理論の勝利）とを、忠実に描いているといえるだろう。



70. 朱苇教授心里十分高兴。他对大家说：“这群猿人已经能够制造工具，能够劳动，已经不是猿了，应该属于人的范畴了。”大家都同意朱教授结论性的意见。

【図版 32】大発見に興奮する朱葦教授（福建版）



74. 雪山魔笛创奇迹。科学家们从获得的大量珍贵资料中，对从猿到人的历史方面的学说，作了重大的修改和补充，震动了世界人类学的科学论坛。

【図版 33】最後の一コマ（福建版）

## 連環画版の雪男像 2（遼寧版）

さて、では遼寧版に描かれた雪男像に注目してみよう。上述の通り、こちらは前半



14 次仁说，在十七世纪前期，很多朝拜过天嘉林寺的人——其中有官吏、商人和旅行家，都目睹过拉布山嘉措用魔笛召集山精的事，还用不同文字把经过记载下来。如果说他们的记载纯属虚构也不合乎情理。

【図版 34】記録された伝説（遼寧版）

のチベット寺院における考古学調査や怪奇現象の描写にコマ数を多く割き、実際に雪男が登場する終盤のくだりは驚くほどアッサリしている。

満を持して登場した雪男の姿が描かれているのは、わずか4コマ。しかも、そのうち2コマはシルエット、1コマは頭部のみなので、読者にその全身をきちんと披露しているのはたった1コマである。

前半部で紙幅を費やしてチベットの情景を克明に描いていたのに比べ、肝心の雪男の描写には手を抜いてしまったのだろうか？

——実はそうではない。順番に見ていこう。

まずは物語序盤。「天嘉林寺の魔笛で山精を呼びだした」とする高僧ラプサン・ギャムツォの伝説を紹介したコマ【図版 34】をご覧ください。

原作では、17世紀前半に天嘉林寺を訪れた多くの人々（特にどこの誰とは具体的に指定され



【図版 35】医学図鑑に見える動物

ていない) が魔笛の奇跡を目撃し、記録を残した.....とだけ書かれている箇所であるが、遼寧版連環画には数々の文献とそれを記録した人々の姿も描き込まれている。

もちろん、天嘉林寺の魔笛自体はフィクションであるため、これらの人物も書物も一見もつともらしいが実在しない架空の書物.....のはずである。しかし、左上部の「謎の生き物が描かれた文献」については、実は元ネタがある。19世紀にモンゴル・チベット医学図鑑に掲載された野生動物の図<sup>32</sup>だ【図版 35】。

これは、元々薬となる動植物について絵入で紹介する書物であり、この絵も実在の動物を描いたものと思われるのだが、1950年代の雪男ブームの折に「発見」され、その正体ではないかと盛んに取り沙汰された図版<sup>33</sup>である。

上述の通り、原作「雪山魔笛」では「雪人（雪男）」という単語を一度も使用して

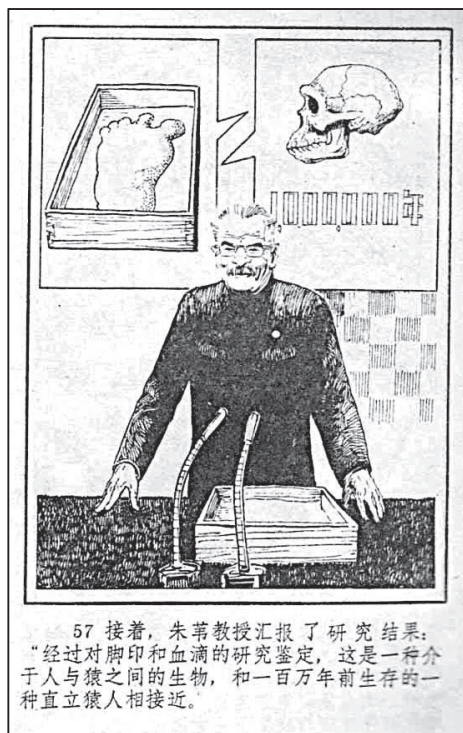
おらず、当然ながら、近現代における現実世界のヒマラヤの雪男探検・研究への具体的言及もない。当然、この植物図鑑に残された生物の図版についても触れられてはいない

つまり、この連環画の絵は、改編者もしくは絵師が、同時代の各国の雪男研究の成果を参照しつつ、「勝手に」書き加えたものなのである。

遼寧版の連環画は、原作を超えて現実世界の雪男事件を積極的に作品中に取り入れていることがわかる。

もうひとつ、北京での科学会議のシーンで、朱葦教授が調査隊の発見した足跡の主を推測する場面をご覧いただきたい【図版 36】。

セリフには、オリジナル通りに「人と猿との中間の生物」「100 万年前に生存していた直立の原人に近い」という表現が残っているものの、原作や福建版連環画では明記されてい



【図版 36】朱葦教授の演説（遼寧版）

57 接着，朱葦教授汇报了研究结果：“经过对脚印和血滴的研究鉴定，这是一种介于人与猿之间的生物，和一百万年前生存的一种直立猿人相接近。”

た「北京原人よりも古い原人」という表現が、割愛されている。福建版のように北京原人のイメージを描くこともなく、物証としての足型と、想像される頭骨を描き込むにとどめている。そして、遼寧版ではここを含め、北京原人には一切触れていないのである。もちろん、文字を入れるスペースに限りのある連環画のこと。単に字数の問題で省いただけということも考えられるだろう。しかし、その次のコマでは、原作と異なる独自のビジュアルを提示することになる。

科学会議でマイクを前に解説を続ける朱葦教授【図版 37】。その後方にコラージュされる5枚の図版にご注意いただきたい。

まずは左上にある「狒狒図」であるが、これは清代に編まれた『欽定古今圖書集成』に収録された図版である【図版 38】。この狒狒図は、やはり神農架〈野人〉騒動の際に、「歴史上の〈野人〉の記録」としてよく引き合いに出されていたものだ。

さらにその右側に「1951」という数字とともに描かれた足跡は、拙稿冒頭でも紹介した、1951年にヒマラヤでエリック・シプトンによって撮影され、世界に雪男ブーム



【図版 37】朱葦教授と5枚の図版（遼寧版）



【図版 38】狒狒図



【図版 39】シプトンの写真

を巻き起こすキッカケとなった写真のトレースだ<sup>34</sup>【図版 39】。

中央左側、「1967.10.26」と日付の入ったものは、同年同月（実際は 20 日）にアメリカはカリフォルニア州ブラフ・クリークで、獣人型未確認動物「ビッグフット」を撮影したとされる映像（撮影者の名にちなんで通称「パターンソン・ギムリン・フィルム」）から、最も有名な「振り返るシーン」である<sup>35</sup>【図版 40】。



【図版 40】パターンソン・ギムリン・フィルムのビッグフット

つまり、ここで背景としてコラージュされている図版はいずれも、世界各国で実際に話題となっていた未確認動物事件に関連してメディアを賑わしたものの、いわば一種のアイコンと化したものばかりなのだ<sup>36</sup>。出典を明記してはいないものの、ご丁寧に事件の発生年（月日）まで付記して、おそらく意図的に「わかる人にはわかる」仕掛けにしている。形象だけ中国

内外の物を適当に流用して（パクって）貼り合わせたのではなく、わざわざその元ネタがわかるような手がかりを残しているのだ。

中国内の〈野人〉実在説の論拠として、自国の記録だけでなく、世界各地の同様な獣人型未確認動物の目撃事例を列挙するのは、当時の神農架〈野人〉ブームにあってはよくおこなわれていた手法である。遼寧版の作り手が、その方面の資料に精通し、現代の未確認動物事情に詳しい人物であったことがうかがえる。

しかし、もちろん原作では、狒狒図も、エリック・シプトンの写真も、パターンソン・ギムリン・フィルムも、何一つ言及されていない。

さらに遼寧版では、朱葦教授のセリフも「古より今まで、野人・雪男・山精などに関する記載は多い」とアレンジされている。原作や福建版が、文献記録の時代（戦国時代から近代）と場所（チベット高原）を限定していたのとは異なり、それらを中国周辺に特定しない曖昧な言い回し（ともすればその範囲は全世界ととれる）にしている。特筆すべきは、ここで原作にはない「雪男」という単語を付け加え、初めて使用している点だ。この時点で、遼寧版は「中国の生きた原人発見物語」ではなく、「世界的な未確認動物・雪男の発見物語」を描いているのだという事実気づかされる。

となれば当然、クライマックスで登場する雪男の姿も変わってくるのだ。

人工的に作られた魔笛の音色に誘われて顔を出した雪男【図版 41】と、全身を現した雪男【図版 42】をご覧ください。鋭角的頭部は、先に見たような北京原人型の獣人とは明らかに異なる。クーンブ地方に残されている「イエティの頭皮」と呼ばれるもの<sup>37</sup>【図版 43】にもそっくりである。そしてその全身像は、イギリスのデイリーメール社の探検隊以降、全世界に広まったゴリラ型の雪男像そのものではないか。



67 朱教授命令调整“魔笛”的音质，根据类人猿的习惯，这声音有催促的意味。果然，灌木丛中出现一个人形的脸向外窥探。朱教授使“魔笛”又响了一下，表示“安全和满意。”

【図版 41】頭を出す雪男（遼寧版）



68 不多时，猿人从树丛中走出来，出现在荧光屏上。他左顾右盼走到空地中央，那里堆放不少面包和牛肉。里面装置了微型无线电发射机，可以测出这些猿人藏身之处。

【図版 42】雪男の全身像（遼寧版）

一応、原作の描写通りに石器を右手に持ってはいるが、熊皮は身にまとっていない。特に髪だけが長いわけでもなく（むしろ短い？）、全身に長い毛が生えていることがわかる。そして、原作や福建版で見られた克明な容貌描写の文章は、（絵とは矛盾するためか）ごっそり削除されている。なにより、原作の肝でもある「火の使用」「労働の痕跡」といったファクターが抜き取られ（言語の使用については言及があるものの、単なる事実の指摘にとどめている）、これでは「彼は人の範疇に属する」「マルクス主義理論の勝利」云々といったセリフも出て来ようがない。

ラストのコマ【図版 44】も、科学研究のために多くの貴重な資料を提供したと言っている部分は原作通りだが、サルから人間への進化の歴史に重大な修正と補充をおこなわねばならなく



【図版 43】イエティの頭皮？

ったというくだけは消えている。

遼寧版『雪山魔笛』は、原作の持っていた「北京原人より古い〈野人〉発見の意義」といったテーマが大幅に薄まり、単純に（純粋に？）謎の生物＝ヒマラヤの雪男そのものをめぐる冒険譚に落ちついていると言えるだろう。

### 雪男が現れ、そして原作者が消えた？

こうして見ると、絵も文章もひたすら原作の記述に寄り添った福建版、原作の基本プロットに従いながらも、現実世界のチベット文物や雪男伝説を適宜参照しつつ積極的に取り入れて見せた遼寧版、といった性格の違いが浮かび上がってくるだろう。

遼寧版のアレンジが、主に改編者によるものなのか、作画者<sup>38</sup>によるものなのか、判断できるだけの材料はまだない。

連環画化された作品から原作者のクレジットが外れること自体は、まああることである。とは言え、作画面でオリジナル要素を付け加え、原作の肝というべきいくつかの重要な文章をそぎ落とした遼寧版から童恩正の名前が消えているのは、ただの偶然にしてもよくできていると考えるものである。

——人は見たいものを見る。

そして、現実世界でははっきり見えない未確認動物という「現象」には、それを一番投影しやすいのかもしれない。

最後に、上述の根深氏がクーンブ地方で取材した際、奇しくも「雪山魔笛」に出てくる伝説の高僧ラブサン・ギャムツォと同じく紅教（ニンマ派）の高僧ラマ・ゲシと交わした会話を紹介しておきたい。雪男＝イエティは目には見えない風のような存在で、足音とか鳴き声だけは聞こえるというラマ・ゲシに、根深氏は疑問を抱く。

私はラマ・ゲシに聞いた。

「見えないのに、どうして絵に描くことができたり頭皮があったりするのですか？」

ラマ・ゲシはおもむろに答えた。



【図版 44】最後の一コマ（遼寧版）

「目に見えなくても心に見えるのです」

なるほど、心眼というやつである。徳のある人には見えるのである。しかし、心眼に映るのは、自らが見たいと念じたものの姿形ではないのだろうか。つまり想像の産物である。<sup>39</sup>

人が想像力を失わない限り、いくら科学や文明という名の春が来ても、雪男が消えてなくなることはないだろう。

その物語もまた――。

---

<sup>1</sup> この時の捜索隊にはロシアのほか、アメリカ・中国・カナダ・モンゴル・スウェーデン・エストニアの七カ国もの研究者が参加し、そのことでも話題となった。ロシアで大規模な雪男捜索が実施されるのは、1958年のソ連科学アカデミーの探検隊以来初めてだという。同時に国際会議も開催された（『朝日新聞』デジタル、2011年10月3日記事、URL: <http://www.asahi.com/special/playback/TKY201110030084.html> 最終確認日 2014年1月24日）。

<sup>2</sup> ロシア国立気象台のサプノフ主任研究員が、前年秋に発見した毛を鑑定した結果として、ノーボスチ通信に語ったという（『朝日新聞』デジタル、2012年11月1日記事、URL: <http://www.asahi.com/news/intro/TKY201210310698.html> 最終確認日 2014年2月7日）。

<sup>3</sup> 『ナショナルジオグラフィックニュース』（日本語版）2013年10月22日記事（URL: [http://www.nationalgeographic.co.jp/news/news\\_article.php?file\\_id=20131022001](http://www.nationalgeographic.co.jp/news/news_article.php?file_id=20131022001) 最終確認日 2014年2月7日）。

<sup>4</sup> 単行本では、本文で紹介した根深誠氏の著書のほか、現地に取材し、イエティ伝説の原形をチベット民族の起源である半人半猿の伝説に求めた、佐藤健寿『X51.ORG THE ODYSSEY 未知なる世界への旅』（夏目書房、2007、のち講談社、2008）、高橋好輝隊長率いる調査隊「イエティ・プロジェクト・ジャパン」に実際に参加し、これまでの雪男探検をめぐる人々の人生にも焦点を当てた長編ノンフィクション、角幡唯介『雪男は向こうからやってきた』（集英社、2011、のち集英社文庫、2013）や、雪男の噂話を追い求めながらブータンの人々との交流を綴った紀行エッセイ、高野秀行『未来国家ブータン』（集英社、2012）など。オカルトのジャンルからも、雪男をメインに扱ったムック本が複数出版されている。

<sup>5</sup> 同書は、これまでの長年にわたる根深氏のフィールドワーク調査に基づく雪男伝説についての考察をまとめたものである。雪男＝チベットヒグマ説については、2004年に「イエティの正体とは何か？」（『山と溪谷』2004年2月号、山と溪谷社）というレポート等で既に指摘している。

<sup>6</sup> “The Abominable Snowman Adventure” by Ralph Izzard, Hughes Massie & co., ltd. 1955. 邦訳はレーフ・イザード著、村木潤次郎訳『雪男探検記』（ベースボール・マガジン社、1957）。その後、1963年に同社から新書判が、1995年に恒文社からも新書判が出ているが、付録のウラジミール氏の論考を収録しているのは、1957年の単行本のみ）。

- <sup>7</sup> 湖北省の原生林地帯・神農架林区で、人とも獣ともつかない謎の怪獣の目撃報告が相次ぎ、中国科学院による三回に及ぶ調査がおこなわれた一連の騒動。詳細は拙著『中国「野人」騒動記』（大修館書店あじあブックス、2002）参照。
- <sup>8</sup> たとえば、神農架〈野人〉に関する最初期の単行本である江廷安・雲中瀧『“野人”尋踪記』（陝西人民出版社、1983）は、〈野人〉がメインの本にも関わらず、第一章冒頭から延々8ページにわたってヒマラヤの雪男だけを詳細に解説している。その他、過去から現在までに出版された〈野人〉関連書物には、必ずといっていいほど、雪男への言及が含まれている。
- <sup>9</sup> 後に単行本『世界最高峰上の奇跡』（少年兒童出版社、1979）、『雪山魔笛』（人民文学出版社、1980）などに収録された。
- <sup>10</sup> 「雪山魔笛」の邦訳は、池上正治訳『中国科学幻想小説事始』（イザラ書房、1990）に収録されており、その全文を読むことができる。ただし、何箇所か誤訳（「原人」を指す中国語の「猿人」をそのまま「猿人」と訳出する等）もあるので注意されたい。武田雅哉・林久之『中国科学幻想文学館（下）』（大修館書店あじあブックス、2001）には、「雪山魔笛」の概要はじめ、他の童恩正の作品群についても詳細な解説があるので参照されたい。
- <sup>11</sup> なぜ中国でも一般的な「雪人」という呼称を採用しなかったのかは不明だが、これは世界的に浸透しているゴリラ型の雪男イメージを、あえて読者に連想させないための方便だった可能性もある。原作では、その代わり〈野人〉という単語が使用されており、北京での科学会議の席上でも、朱韋教授によってチベット高原の〈野人〉の伝説が紹介されるくだりがある。
- <sup>12</sup> 根深誠前掲書 114-115 頁。
- <sup>13</sup> 原文は以下の通り。「作为一个考古学家，我自然知道过去西藏的农奴主阶级惯于利用喇嘛的迷信活动欺骗人民，为他们的统治服务，因此在一般情况下，是不会认真地去对待这类传说的」。『雪山魔笛』（人民文学出版社、1980）2-3 頁。以下、本文の引用には、人民文学出版社版の単行本における掲載頁を示す。
- <sup>14</sup> 原文は以下の通り。「在旧社会，特别是落后的西藏农奴制社会里，当人们还没有掌握大自然的奥妙，还不可能了解它的规律时，很多科学的现象都被披上了迷信的外衣，并且被统治阶级有意歪曲来为他们的利益服务。我以为‘魔笛’的问题，就可能属于这种性质」。『雪山魔笛』9-10 頁。
- <sup>15</sup> 原文は以下の通り。「根据上级党委的指示，要完成这项任务，必须运用最新的科学技术，先进的仪器设备，发挥社会主义的大协作」。『雪山魔笛』25 頁。
- <sup>16</sup> 原文は以下の通り。「一条一条的建议，一项一项的设想，逐渐地形成了一个完整的作战方案。它显示了集体的智慧，社会主义科学大协作的威力」。『雪山魔笛』26 頁。
- <sup>17</sup> 原文は以下の通り。「总的来说，他们已经能够造工具，能够劳动，因此，他们已经不是猿，而是属于人的范畴了。劳动创造世界，劳动创造了人，这一伟大的真理，现在有一次得到了确切的证实。同志们，我们现在所看到的，并不是简单的自然现象，而是自然辩证法的胜利，是马克思主义理论的胜利啊!」。『雪山魔笛』33 頁。
- <sup>18</sup> 原文は以下の通り。「在旧日的佛龛上，装置着闪烁着红绿信号灯的操纵板，神怪的壁面前，是大大小小的萤光屏。雷达和电视接收天线，矗立在屋顶的经幡之上。于是，古老和现代，迷信和文明，在这里形成了强烈的对比，这可以说是世界上气氛最为奇特的一座实验室了」。『雪山魔笛』27 頁。

- <sup>19</sup> 詳しくは、拙稿「怪獣とプロパガンダ——中国“野人”をめぐる言説に潜む政治と科学——」（『鰐鰯』第11号、2003年10月、所収）参照。
- <sup>20</sup> 山本宏子氏は、たとえば鳥葬などにおいて、事前に肉体から魂を抜く儀式をおこなうが、これは魂は転生して他の生き物に生まれ変わるといふ輪廻転生の死生観に基づいており、「人間を素材として楽器を作ることは、人体もまた物質に過ぎないという考え方がその根底にあるのではないだろうか」と推測している。山本宏子「チベットの芸能と楽器と生死観」（『アジア遊学』No.23「特集・チベットの美術と芸能」、勉強出版、2001、所収）参照。
- <sup>21</sup> 直接のモデルとなった寺院は不明（あるいは避暑山荘か？）。
- <sup>22</sup> 原文は以下の通り。「瞪目咧嘴，手持法轮，脚踏妖魔，形象十分可怖」。『雪山魔笛』4頁。
- <sup>23</sup> 憤怒の表情を浮かべた水牛の顔を持っていることから、チベット密教のヤマーンタカ（大威徳明王）かと思われるが、正確には不明。
- <sup>24</sup> 原文は以下の通り。「这明显是用胫骨制成的，两端镶嵌着银饰。在旧社会喇嘛的法器中，人骨笛是常见的东西。除了这一支笛子制作得特别精致以外，我确实也看不出有什么特别之处。」。『雪山魔笛』8頁。
- <sup>25</sup> 原文は以下の通り。「他的头上披着粗长的头发，除了脸部以外，全身都有茸毛。前额低平，向后倾斜，眉脊突出，鼻梁低而宽，下颚往后缩，脖子短而粗，整个头部向前伸，就像半低着头的样子。他的身躯十分强壮，两臂很长，相形之下，脚却很短，而且微微弯曲。他披着一块熊皮，一手持者一块拳大的石制刮削器。猿人，这就是早从自然界消失了了的猿人，不是博物馆里根据几块化石复原的标本，而是生生活的实体。」。『雪山魔笛』31頁。
- <sup>26</sup> これは1979年に少年児童出版社『世界最高峰上的奇跡』に収録された「雪山魔笛」に付けられた「森から姿を現す原人」である。ちなみに1980年に人民文学出版社から出された小説集『雪山魔笛』収録の同作には、直接原人を描いた挿絵はない。
- <sup>27</sup> 中国語の「猿人」は、厳密には日本語の「原人」に相当するが、ここではタイトル通りに表記した。
- <sup>28</sup> フリードリヒ・エンゲルスが著書『猿が人間になるについての労働の役割』（1876）において展開した主張である。
- <sup>29</sup> 生物学者の劉民壯が神農架での聞き取り調査をもとに作成し、自身の論文「沿着奇异的脚印——鄂西北山区“野人”考察」（『百科知識』1979年第2期所収）に掲載したもの。その後、様々なメディアで、このイラストの模写などが拡散していき、〈野人〉の代表的なイメージを固定化した。
- <sup>30</sup> 前掲拙稿「怪獣とプロパガンダ——中国“野人”をめぐる言説に潜む政治と科学——」、および拙稿「一九八〇年の中国怪獣——改革開放初期のメディアと怪獣物語」（『横浜国大言語研究』第30号、横浜国立大学言語・日本語教育学会、2012年3月所収）参照。
- <sup>31</sup> 日本でも1980年7月5日から8月31日にかけて、上野の国立科学博物館で「北京原人展」が開催され、会期中50万人以上の来場者を記録している。中国以外で北京原人の化石や復元図などが展示されたのは初。同展は東京の後、名古屋・北九州などを巡回し、翌年1月に閉幕した。共催の『読売新聞』は、この年大々的な特集記事を連載。1980年は日本国内でも北京原人ブームが起これると同時に、それと

関連付けられるように神農架の〈野人〉報道がピークを迎えた年でもあった。

<sup>32</sup> この図版は 1959 年 6 月 7 日にソビエトの中央機関紙『コムソモリスカヤ・プラウダ』に初めて掲載され、次いで同年、同国の『雪男問題特別研究委員会通報』第三号に公表された。雪男問題に関心が高いイギリスでも、人類学雑誌『マン』1959 年 8 月号に転載している。本稿で引用した図版は、全ロシア自然保護協会の雪男問題特別研究委員会議長の B・ポルシネフが科学雑誌『知識は力』1960 年 2 月号に発表した論文「“雪男”論争」の邦訳（袋一平訳、『岳人』1960 年 6～8 月号所収）より引用した。この邦訳では動物を「ミギョー」と呼称している。論文発表当時、図版は「レニングラードとウランバートルの古文書保存館にある」ということをポルシネフは書いている。同医学図鑑は 18 世紀到北京でも出版されており、そこにも同様な動物図が掲載されているが、ポルシネフはそちらの図版も引用しつつ、北京版の方が動物的であり、「写生ではないとしても、はるかにオリジナルに近いことがみてとれる」としている。さらに、19 世紀のウランバートル版は「画家が描かれる動物を知らないことが暴露されている」とし、「この画家は、おそらく民衆あるいはラマ教の伝説に影響されてこの生物に野生動物というよりも、むしろデモン、人間の形をした悪霊の相貌をあたえている」と考察を加えている。このように、雪男とは、実在の動物が空想的・悪魔的に変化することで「伝説化」したものとポルシネフは考えており、これも一考に値する。また、北京版・ウランバートル版ともに、この動物の図版には「罽」という漢字名が書き添えられており、こちらも非常に興味深い。中国では昔から〈野人〉タイプの怪獣として「罽」「人熊」という名の生物が記録され、描かれてきた。雪男も含め、「〈野人〉と熊」の問題については、稿を改めて考察したい。また武田雅哉先生より、清朝の乾隆期に編纂された『五体清文鑑』（故宫博物院蔵、民族出版社出版、1957、全 3 冊）巻 31「獣部」を参照すると、漢語の「罽」の字に対応する満州語があり（4247 頁）、それは、くだんの図版左上に記されているものと同じ単語であるとのこと指摘をいただいた。そこには、これに対応するチベット語「mi dret, mi jet」（『五体清文鑑訳解』田村実造、今西春秋、佐藤長共編、京都大学文学部内陸アジア研究所、1966 による）も載せており、あるいはその音が「ミギョー」という名前につながるものとも思われるが、詳細はまだ不明である。この図版の動物の素性と、その呼び名の問題については、旧ソ連の雪男研究を踏まえつつ、今後とも調査を続けていきたい。

<sup>33</sup> 雪男関連の書籍では、チベットの謎の生物としてたびたび引用される。上述のように最初の発信はソビエトのメディアだが、イギリスでも取り上げられ、広まっていった。中国でも同様に、たとえば、前掲『“野人”尋踪記』は雪男を詳細に紹介した第一章において、「チベット高原の野生動物を描いた古画に見える“雪男”（?）」と、クエスチョンマーク付きながら、この図版の模写を掲載している（同書 7 頁）。

<sup>34</sup> 写真はアンガス・ホール著、桐谷四郎訳『ネッシーと雪男』（学研、1976、原著“Monsters and Mythic Beasts”, Angus Hall, Aldus Books, London, 1975）から引用。

<sup>35</sup> この映像の真偽については、公開当初より諸説あった。写真は、バターソン・ギムリン・フィルム制作の内幕に迫ったドキュメント本、“The Making of Bigfoot The Inside Story”, Greg Long, Prometheus Books, New York, 2004 から引用。

<sup>36</sup> 中央右の図版は、元ネタとなる写真は今回見つけられなかったが、同年に発見されたイエティもしくはビッグフットの足跡であろう。左下の図版も、オリジナルは

発見できなかったが、確かに 1972 年 12 月 17 日にヒマラヤでイエティの足跡目撃事件が記録されており、おそらくその時撮影されたものと思われる。

<sup>37</sup> ここで引用した写真は、1953 年のイギリス。デイリーメール社の探検隊が撮影したクーンブ地方クムジュン寺にあった「イエティの頭皮」と呼ばれるものを持つ僧侶（前掲『雪男探検記』から引用）。元は祭祀用だったが、雪男ブーム以降、拝観料をとって観光客に見せているという。現地の「雪男の頭皮」と呼ばれるものは複数あり、中には紛失したものもある。かつてそのいくつかが西欧に持ち帰られ鑑定されたが、みな他の動物の毛で作られた人造物という結論が出ている。このあたりの経緯については、根深氏の前掲書に詳しい。

<sup>38</sup> ちなみに遼寧版の絵師・王弘力（1927- ）は連環画界の巨匠。絵画以外の多くの学問にも精通する博学多才の人であった。人物造形を通じて、その内面の力を表現することに重きをおき、美術理論書なども執筆している。物語の舞台となる年代の社会風俗や道具・服飾のリアリティに対する研究には、とことん時間と精力とを注ぎ込んだという。作中に見える情景の信頼度は、彼の豊富な見聞と実証的な作風から生まれたものであった。1953 年に東北画報から出版された連環画『解仇合密』では、チベット解放を描いているが、やはり人物造形や服飾、文物などがリアルに描かれている。このような、作品へ取り組む姿勢と経験の蓄積とが、『雪山魔笛』においても遺憾なく発揮されたと見ることでよい。以上、王弘力の人物像と作品については、麦荔紅『図説中国連環画』（嶺南美術出版社、2006）を参照した。

<sup>39</sup> 根深誠前掲書 82-84 頁。

＊本稿執筆にあたっては、武田雅哉先生・田村容子氏・藤井得弘氏に連環画の資料提供・情報提供をしていただいたほか、多くの方にご助言をいただきました。この場をお借りしてお礼を申し上げます。ありがとうございました。